

多賀

社報「たが」

社殿を護る職人氣質

百花繚乱の好季を迎えました。氏子崇敬者の皆様には、平素より当社へお心をお寄せいただき厚く御礼申し上げます。

さて、多賀大社の現社殿は、昭和七年竣工の境内整備事業によって造営されたものです。正面に重層入母屋の拝殿、両脇には鳥が羽を広げたような翼廊を設け、その奥に神様へ捧げる幣帛（へいはく）や供物を納めるための社殿である幣殿、そして本殿が設けられ近代を代表するような神社建築であると高い評価を受けながらも九十余年を経ました。檜皮の屋根は幾度かの葺き替えや、社殿の経年劣化等の損傷はその都度、部分改修を繰り返して今日に至っています。諸殿舎を未来に継承する為の保全改修は始まりがあってもゴールがありません。

昨今の改修は文化財関係や社寺建築に携わり、優れた技術を持つ地元企業に社殿全般のメンテナンスを依頼しています。担当する職人の技術は高く、細部に至るまできめ細やかな配慮には頭が下がる思いであり、後世に残さねばならない大切な文化財を任せるに相応しい人格を持つ職人です。

俗に「職人氣質」（しょくにんかたぎ）という言葉がありますが、手作業で物を作ることを生業とする人の事で、『広辞苑』によると「粗野で頑固だが実直である職人」と記され、元文化庁文化財監査官 豊城浩行氏によれば、「職人氣質」という言葉は、職人に対する最高の褒め言葉であると思う。職人氣質の者が備える技が職人芸である。自らの技術に自信と誇りがあればこそ持てる頑固さと共に、誠実さや気高さが伴ってこそ使うべき言葉であると思う。自分の仕事に責任を持てる者だけが貰える称号的な言葉でもあると思う。」と述べられています。

社は性質上、神事を護り世代を越えて伝えて行かなければならない事が多々あり、社殿も大切なその一つであります。社寺建築に精通し優れた高い技術と誇りを持つ技術者が常に側にいることは有難い事です。

宮司 片岡 秀和

古式
ゆかしき

古例大祭

たがまつり

去る一月三日に差定式が執り行われ

古例大祭の幕が開けました。

本年は馬頭人に彦根市の高木淳一氏が

御使殿に多賀町尼子の岸邊亮典氏が

各々大神様の差し定めによりご奉仕なされます。

四月に入ると折々の諸祭事が執り行われ

四月二十二日の大祭を迎えます。

鎌倉時代から連綿と続くお多賀さんの

古例大祭が湖国の春を彩ります。

馬頭人



たかぎ じゅんいち
高木 淳一氏

昭和29年11月11日生（満71歳）
・住所 彦根市後三条町
・現職 株式会社高木造園 代表取締役
・受章 令和2年 黄綬褒章
令和7年 旭日雙光章

御使殿



きしべ りょうすけ
岸邊 亮典氏

平成24年2月27日生（満14歳）
・住所 犬上郡多賀町多賀
・現在 多賀中学校 2年生

※令和8年3月1日現在



差定式

◆当日の流れ

午前 8 : 30	本殿祭
午前 10 : 30	御神幸出発 宮司以下祭員は栗栖（調宮神社）へ 馬頭人・御使殿は彦根市（都恵神社）賓台へ
午後 1 : 00	調宮神社を出発
午後 2 : 00頃	本社前を通過（馬頭人・御使殿合流）
午後 3 : 30	富ノ木渡し式
午後 4 : 00	尼子の御旅所を出発（本渡り）
午後 4 : 30	本社到着 夕日の神事





祈年使



三月十七日

祈年祭奉仕

(豊年講春季大祭)



西山 實 氏

犬上郡甲良町 西甲良地区

〈講員数〉182名

父親が豊年講の小世話係を務めていた関係で娘が御田植祭の早乙女を奉仕。私自身も還暦の時、節分祭で福豆まきの奉仕をさせて頂いており多賀大社

とはご縁が深いと感じております。此度は祈年使という大役を引き受け、身に余る光栄であり無事祈年祭を奉仕したいと思っております。

座右の銘：有言実行



豊年使



十一月二十三日

新嘗祭奉仕

(豊年講秋季大祭)



野村 栄 氏

犬上郡豊郷町 日枝地区

〈講員数〉70名

此度、多賀の大神様のご神慮により豊年使を受け驚天動地で心臓が飛び出るほどの思いでありましたが、これも神のお導きと日枝地区世話係さまの

ご協力を得て謹んで新嘗祭をご奉仕申し上げます。多賀大社のご神前で結婚式を挙げ、現在は孫10人も恵まれ、それぞれの節目にご神恩に感謝し参拝しております。

座右の銘：人間万事塞翁が馬



は参入証が必要です。

なお、一般の方のご神田での見学に

の神饌としてお供えされます。

ます。秋に収穫される神米は年中祭事

りに合せ古式床しき田植神事が行われ

を受け取った早乙女がご神田へ進み、

本殿祭終了後には、早苗司より神苗

が早苗司として奉仕。

御田植祭では祈年使・豊年使の両使

代にはすでに行われていたとされます。

御田植祭の始まりは定かではありません

んが、「多賀大社儀軌」によると江戸時

七日となります。

御田植祭は毎年六月の第一日曜日に斎行され、今年も六月

七日となります。

御田植祭

御田植祭へご協賛頂いた方へは当日ご神田への参入証と手ぬぐいをお渡しさせて頂いております。

協賛金は一〇一、〇〇〇円からとなっております。

御田植祭ご協賛と参入証



古例大祭 のなかの 民俗的 要素

滋賀県立大学 市川 秀之

多賀大社の古例大祭は言うまでもなく滋賀県を代表する神社行事であり、全体的には当然のことながら神道の祭祀に則っておこなわれる。ただその細部にはひなびた村落の祭にみられるような非常に民俗的な要素が伝承されており、それらが逆にこの行事の伝統性を示している。ここではそのような例をいくつか紹介することとした。

じんぼや（神甫屋）

馬頭人は祭礼の前日から奥書院でお籠りをするが、その床の間には「じんぼや」が設けられる。これは四本の柱（四隅と中央）の上に屋根が載るシンプルな構造のもので、高さは二・五メートルになる。これは四月一日に設けられ、四月十一日には神職が中央の柱に大榊、前の柱

に玉串を付け、注連縄二本を柱間に渡す。神事に際しては中央の大榊に神鏡が吊るされる。このじんぼやはかつては馬頭人の家の座敷に設置されており馬頭人はそこでお籠りをしていたが、床の間や座敷のない家なども増えたため、現在では奥書院に設けられるようになったものである。

多賀大社のじんぼやに類するものは、各地の宮座儀礼で時折見ることができ、これらは「おはけ」と呼ばれることが多く、滋賀県では東近江市河桁御河辺神社の御河辺（みかべ）祭や、同市春日神社のゆきかき祭でみられるもの知られている。前者は祭に参加する集落によって差異があるが、四角く切り取った田の土を積んだものを主体とし、その前に供物台、後ろに番傘を立てるものが多い。また後者は竹と柴で垣



奥書院のじんぼや

を作ったものである。また近江八幡市北之庄のおはけは三方を菰でかこみ、内部に石を積んでカマドのようにしてその上に釜を載せた変わったものである。いずれのおはけも野外に設けられる。かつてはこれらも馬頭人の家の前に設けられていたが、その後公民館などの前に作られることが多くなっている。

奈良県にもおはけの事例が多い。私がかつて調査をした天理市乙木のもものは五〇センチ四方の台の上に灯籠を置いて上に屋根をかけ、屋根や周囲を杉の葉で覆ったもので、やはり頭屋の家の前に設けられる。なかには天理市柳本永のように人が入れるほど大きなものもみられる。これらのじんぼややおはけは、頭



東近江市妙法寺のおはけ

人の家に神霊を迎えるために設けられたものと思われるが、社会的にはその家が頭屋であることを示す存在であったと考えられる。その場所は当初の頭屋の家から公民館前などに移動し、それも近年では設けられなくなる傾向がある。その意味でも多賀大社のじんぼやの存在は貴重である。

おせんじき（先食）行事

多賀大社本殿の西側に「せんじき」とよばれる一本足の台が立っている。ここには毎朝神職が洗米を供え、また古例大祭でも「もっそう」とよばれる米の神饌が供えられる。もっそうとは白蒸しを型に入れて円筒形にしたものに藁を

三本巻きつけたもので、これも各地の神饌によく見られる。せんじき台に供えられた神饌をカラスが食べないと神前に神饌をあげることができないとされている。多賀大社のせんじき台にもっそうが供えられている様子は室町時代の

「多賀参詣曼荼羅」にも描かれ、その歴史の古さがうかがわれる。烏が神饌を食べるかいなかで、その後の成り行きを占う行事は烏勧請と呼ばれることが多く、滋賀県では山の神行事などでよく見られる。たとえば東近江市岡田では供物の餅やシトギをカラスが食べると豊作だとい、同じく川合寺ではカラスが供物を食べるまで帰らず待っていたという。シトギとはもち米を粉にしたものを水で溶いて丸めたもので、山の神の供え物によく用いられる。これらの山の神行事のなかで、このカラスに神饌を食べさせる行事のことを東近江市今代では「せんじき」、五智・御園等では「せんじきあげ」と呼ばれており、多賀大社のものと名称面でも通じるものがある。

私はよく福井県若狭地方にも民俗調査にでかけるが、この地方にもせんじき行事がみられる。若狭町神子は日本海に面した漁村であるが、一月一日にジンジという正月行事がおこなわれ、そのとき海辺の辻に餅を置いておく。この餅を

カラスが食べると大漁になると伝えられており、この行事もせんじきと呼ばれている。滋賀県の山の神行事は農耕儀礼としての性格が強いが、浜辺の村では漁業に関連してこの行事が伝承されているのである。

せんじきという名前も不思議であるが、これは日本で一番大きな『日本国語大辞典』にも登場しない言葉であり語義は推定するしかない。「先食」と書かれることもあり、その名の通り事柄がおこる前にカラスが餅やシトギを食べるかどうかで将来を占うという意味の古い言葉かと思われる。問題はカラスになぜ将来を占わせるかである。カラスは現在では不吉な鳥として扱われることが多いが、八咫鳥が神武天皇を檀原の地に案内したという古代神話を示すようになっては神の使いとされていた。多賀大社のおせんじきや各地の烏勧請行事もこのような古い時代のカラスの性格を今日に伝えるものといえるだろう。



おせんじきの台

節分祭

福は内!
鬼は外!

奉仕者ご芳名(順不同・敬称略)

二月三日 節分祭が執り行われました。

節分を過ぎれば、暦の上では春。当日は福を求め、一足早く春を待つ参拝者で賑わいました。今回のご奉仕を以って節分会員になられた一八名の皆さまをご紹介します。

◆多賀町

松宮 正和
松宮千津子
浅井 啓行
中嶋 知也
加藤 剛

◆甲良町

野瀬 隆之

◆愛荘町

中村 康之
菱沼千代子
上林 輝安
上林 定幸
中村 和広
本田 秀樹

◆日野町

奥野 彰久
奥野八千代
奥野 誠
奥野寿美子
正木 博之
居永 威王

◆吉村 洋平

清水 和啓
満田 久樹

◆竜王町

西村 泰宏

◆近江八幡市

高木香奈子

鳥居 勝久

山内 貴司

野々村善一

中村 泰彦

松浦 初美

大津市

藤岡 昌子

甲賀市

赤井 一隆

◆湖南市

山本 正之

◆長浜市

太和田厚子
林 広美
西村 保彦

伊吹 良彦

西脇 和美

瀧本 桂子

金子 勉

西川 茂樹

伊藤 誠一

安藤 英仁

伊吹 誠司

伊吹 正

今荘 満

河崎 芳輝

北川 滋喜

山内 章弘

片桐 裕

鳥居 義和

杉中 克行

清水 和彦

南部 智士

中村 啓一

中川 重和

澤田 文一

澤田真由美

野阪 定幸

高宮 健司

伊藤 啓司

北川 英樹

内貴 健一

内貴 成美

土田 花子

河村 政仁

菌田 昌孝

山田 幸雄

泉 和宏

野村 浩一

松下 賢治

三浦 好雄

片山 政一

西川 弓子

中西 純子

阿部寿一美

込山 康広

込山 幸子

堤 慶次郎

佐藤 祥二

佐藤加代子

寺田 俊亮

彦根市

上田 勝之

藤田幸之助

浅井 久之

清水 栄一

今村 康博

谷沢 克也

吉田 康廣

吉田由貴子

長崎 任男

阿達 洋一

田中 滋啓

林 宏昭

綿貫 敦

綿貫 雪江

藤野 人美

藤野 康江

◆米原市

須藤 秀尚

藤敦 秀彦

松尾 浩典

北川貴美子

金子ひかり

久保田忠治

居林 明彦

居林 明子

川幡 浩之

奥野 光博

伊賀 將隆

野洲市

田中小百合

◆栗東市

寺田 靖広

西村 嘉城

高田 正敏

岩松 豊広

竹村 健

東京都

永井雷太郎

大垣市

林 太香子

海津市

近藤 康成

近藤 雅美

京都市

前田 朝子

◆御礼

福豆奉納
鬼神楽奉納

神崎 治氏
因原神楽団



豊臣秀長と

お多賀さん



権宮司 稲毛 友幸

母大政所の祈願文

多賀大社では百三十六通におよぶ古文書（多賀大社文書・県文化財指定）を宝物として所蔵しております。その中には、織田信長や武田信玄、さらに徳川家康などの著名な戦国武将の文書があります。中でも豊臣秀吉は群を抜いて十五通もの多くの書状が残っています。

秀吉文書の中でも、天正十六年に秀吉の母・大政所が病気になった際の平癒と延命を祈願した文書は有名で、母親の命を「あと三年、しばらくは二年、実々ならずば三十日にても長らえさせてほしい」と切実な願いを綴っています。いかにも秀吉らしい母への傾慕の念を表す内容で、この甲斐あって大政所は本復されたと伝えられています。

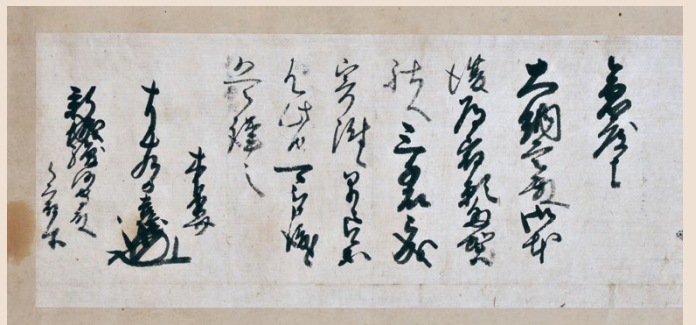
弟秀長も多賀大社へ

現在放送中のNHK大河ドラマ「豊臣兄弟!」では、秀吉（藤吉郎）の弟、秀長（小一郎）が主人公となって一躍脚光を浴びることとなりました。

秀長は、兄秀吉と三歳違いの弟（異父弟説もあり）で、兄を影のように支え、時には戦いの軍師として活躍して天下統一に貢献をし、のちに大和大納言と称された人物でした。

その秀長と多賀大社との関係を示す一通の文書が残されています。

天正十八年十月十九日、秀吉の側近であった木下吉隆が奉行の新城駿河守へ宛てた書状です。その内容は、「このたび郡山城主の大納言秀長殿が病気になったので一日も早く回復することを多賀社に祈願し、ついては三千石を寄附するので急ぎよろしく頼みます」と書かれています。



▶ 豊臣秀長祈願文

この頃になると秀長は、長かった激務に体を蝕まれて病に臥せておりました。秀吉も大和郡山へ赴いて病床の秀長を見舞ったりしましたが、残念ながら、この手紙の三か月後に人生の幕を閉じるのです。享年五十二歳でした。

先の天正十六年の母大政所の文書といい、二年後の弟秀長の病氣平癒祈願も、どちらも秀吉にとって大切な肉親の延命を願ったもので、多賀大社が豊臣家の重要な祈願所としての役割を担っていたことがわかります。

このあと豊臣政権は崩壊の一途をたどっていくのです。

急度申候

大納言殿御本

復為宿願多賀

社へ三千石被成

寄附候早々被參

候て此由可被申渡候

恐々謹言

木下半介

(天正十八年) 十月十九日 吉隆(花押)

新城駿河守殿

御宿所

